

不思議な宿泊者
忙しなく鼻を往復する風の音が響いていた
理解できる言語を口にしたという最後の砦が
辛うじて番才の理性を繋ぎ止めていたが、全
身に鳴り響く警報を止めることはしなかった
喪服のような極力主張を避けた黒の着物を纏
う能面は申し訳なさそうに頭を傾ぎ、開いて
いるのか瞑っているのかわからない目で椅子
に座ったこちらの足元に顔を向け、次の言葉
を紡ぐ気配を見せなかった。
「ひっひっひっ。面白い光景だね。」
後ろで沈黙を破った女将の声に反応して番才
は振り返ったが、すぐにまた正面を向いた。
すると同じように女将の声に反応していた美
禄と視線が交じり、番才はそのまま視線を動
かせなくなつた。数十分前の出来事さえなけ
ればこれほど緊張と疑心に支配されることは
ないのだろうが、感情の推測もできないこと
に更に恐怖は増していく。

言	は	「	合	俯	裕	女	自		性	れ	黒	様	椅	な	床	床	「	あ	
っ	知	同	っ	き	の	將	己	「	格	、	の	に	子	い	と	と	あ	ん	
て	っ	じ	て	な	あ	の	紹	さ	や	ツ	長	な	に	を	着	着	ん	た	
ね	て	宿	い	が	る	年	介	つ	ヤ	ヤ	長	な	着	擦	物	も	た	も	
、	て	に	る	ら	言	者	は	ち	と	と	い	な	席	る	の	髪	こ	こ	
あ	お	宿	。	お	い	が	ま	ら	を	光	ち	こ	す	音	間	の	こ	つ	
ん	き	泊		互	回	若	だ	っ	者	沢	ら	ち	る	は	か	ら	ち	に	
た	な	し		い	し	を	な	と	を	は	っ	な	ま	は	見	来	来	来	
の	さ	て		の	に	か	ん	会	か	謎	と	の	た	ま	え	て	て	て	
一	い	い		手	も	ら	だ	っ	う	め	所	の	違	違	隠	。	。	。	
個	。	る		元	番	か	ら	た	？	い	作	の	い	い	れ				
上	番	か		辺	才	う	か	み	」	た	な	は	女	履	し				
の	才	ら		り	と	時	う	た		の	は	性	き	て					
階	、	ね		を	美	の	の	い		人	女	方	慣	い					
に	、	。		ち	禄	よ	う	だ		物	性	や	れ	。					
、	そ	名		ラ	は	う	な	け		の	ら	、	、						
そ	う	前		チ	動	な	余	ど		一	し	、	い						
う	だ	く		ラ	揺	余		ね		部	く		い						
だ	ね	ら		と	し			、		の	い		い						
ね		い		見	、					の	ら		い						

」

え、二月ほど前から泊まってる子だよ。」

番才は俯いたまま美祿に向け更に頭を下げ、

理解したことを伝えた。

「もう一つ言うかね、この子はおんたのいた世界とは少し違う世界から来ている。ずれたと言った方がわかりやすいかもしれないね。その女将の発言に反応して番才は顔を上げ、今度ははつきりと隣に座り俯く美祿の横顔に視線を向けた。「宇宙人」や「異世界人」という言葉が頭を過ぎり、妙に納得できた自分との言い争いが脳内で繰り広げられ始めた。

「そして美祿や、この子は天下番才と言つてね、今日で五日目だよ。おんたの階の下に泊まってる。補足は・・・特にないね。何か困ってるようだったら助けてあげな。」

「・・・はい。」と小さく言葉を発した美祿は「よろしくお願いします。」と俯いたまま正対し、そのまま頭を下げた。

「ああっ！いえ、こちらこそよろしくお願

いします。まだまだ分からないことだらけな

伸	び	た	首	だ	け	が	二	階	の	ベ	ラ	ン	ダ	に	現	れ	た	こ
め	か	ら	再	生	す	る	。											
な	が	ら	、	番	才	は	ベ	ラ	ン	ダ	で	の	出	来	事	を	ま	た
顔	を	上	げ	た	美	禄	の	顔	を	再	度	ま	じ	ま	じ	と	見	つ
大	変	失	礼	い	た	し	ま	し	た	。								
「	・	・	・	あ	の	！	・	・	・	先	程	は	、	お	騒	が	せ	し
緊	張	や	逡	巡	が	声	に	含	ま	れ	て	い	る	。				
「	あ	っ	、	は	い	。」												
わ	り	に	美	禄	の	行	動	の	真	意	を	尋	ね	て	く	れ	た	。
や	れ	や	れ	と	番	才	の	視	線	を	受	け	止	め	、	女	将	が
だ	ろ	う	？	」														
	「	何	か	言	い	た	い	こ	と	が	あ	っ	て	声	を	掛	け	た
将	へ	顔	を	向	け	た	。											
ば	い	い	の	か	わ	か	ら	ず	、	助	け	を	求	め	る	よ	う	に
に	な	っ	て	お	り	、	顔	を	上	げ	て	か	ら	次	に	何	を	す
に	頭	を	下	げ	た	が	、	頭	の	中	は	様	々	な	思	考	で	虹
番	才	は	常	套	句	の	よ	う	に	丁	寧	に	言	葉	を	並	べ	慇
い	た	し	ま	す	。」													
し	れ	ま	せ	ん	が	、	そ	の	際	は	何	卒	よ	ろ	し	く	お	願
の	で	、	お	力	を	お	借	り	す	る	こ	と	が	多	々	あ	る	か
も																		

音		た	あ	て	方	そ	に	こ	「	あ	言	袈		た	い	と	泣	そ	と
が	そ	。	の	い	へ	う	驚	え	下	の	う	裟		。	が	こ	い	し	、
鳴	の		時	る	と	話	か	て	の	気	か	に			、	ろ	て	、	、
っ	時		の	あ	向	し	す	き	道	に	。	し			と	。	。	い	。
た	、		自	ろ	い	な	つ	ま	を	し	。	な			言	。	。	て	。
。	番		分	う	て	が	も	し	歩	。	い	。			。	。	。	。	。
女	才		の	こ	い	ら	悪	て	い	。	。				。	。	。	。	。
将	の		行	と	。	体	気	、	る	。	。				。	。	。	。	。
に	背		動	が	。	は	も	何	時	。	。				。	。	。	。	。
背	後		に	伝	。	カ	な	だ	に	。	。				。	。	。	。	。
を	で		罪	わ	。	ウ	く	ら	上	。	。				。	。	。	。	。
向	「		悪	る	。	ン	て	う	か	。	。				。	。	。	。	。
け	ド		感	だ	。	タ	な	と	。	。	。				。	。	。	。	。
る	ン		を	け	。	ー	い	思	。	。	。				。	。	。	。	。
形	っ		覚	に	。	の	。	っ	。	。	。				。	。	。	。	。
で	!		え	、	。	奥	。	た	。	。	。				。	。	。	。	。
入	と		始	番	。	の	。	だ	。	。	。				。	。	。	。	。
口	鈍		め	才	。	女	。	け	。	。	。				。	。	。	。	。
側	い		て	は	。	将	。	で	。	。	。				。	。	。	。	。
か			い		。	の	。	別	。	。	。				。	。	。	。	。

横	女	の	音		の	た	こ	が	そ	グ		将	ー	と	「	か	た	ら
で	将	か	か	「	成	視	け	お	う	ラ	「	の	ン	思	本	形	後	
、	と	も	ど	何	り	線	し	盆	言	ス	本	方	！	わ	当	跡	ろ	
美	無	・	こ	も	行	を	が	の	わ	が	に	を	あ	に	に	の	を	
禄	言	・	か	・	き	見	静	上	れ	倒	外	向	っ	侵	外	な	振	
の	で	・	の	あ	を	て	か	だ	て	れ	見	い	入	し	い	い	返	
首	意	し	、	り	理	、	に	と	初	て	ば	。〃	て	て	木	と		
が	思	れ	部	ま	解	番	左	い	め	か	か		き	の	の	、		
元	の	ま	屋	せ	し	才	右	う	二	り	大		て	何	建	一		
あ	疎	ん	で	ん	た	は	に	こ	つ	振	人		い	か	物	見		
っ	通	だ	誰	宿	。〃	一	頭	と	目	り	で		た	が	の	し		
た	を	〃	か	の		つ	を	を	に	美	同		慌	自	中	て		
場	図		が	に		謎	抱	知	当	禄	時		て	分	に	何		
所	っ		何	〃		を	え	り	た	へ	に		た	の	、	事		
へ	て		か	〃		た	た	美	だ	と	長		番	す	も			
と	い		を	〃		ま	だ	禄	け	送	く		才	ぐ	起			
戻	番		し	〃		ま	け	へ	さ	っ	で		は	真	こ			
っ	才		た	〃		事	さ	と	。〃	こ	「		女	横	こ			
て	の		だ	〃			〃	送		っ	力				こ			
い				〃				っ							っ			

く。	番才の発した叫び声は耳に届いていたら	しく、	肩は下がり定位置の首はカウンターと	平行になるまで垂れ下がり、両腕で二の腕を	抱え震えていた。	「グラスが倒れただけで叫んでちゃ先が思	いやられるよまったく。」	一連の流れを日常に戻すように女将が言った	言葉に、番才は平常心を心掛けて同調した。	「自分でも自分が情けないですよ。本当にわ	たしはダメダメですね。グラスが倒れた時の	音だけで驚いてしまおうとは。」	目を合わす女将は優しく笑いかけてくれてい	る。一部分を強調しすぎたかもしれないと不	安になる気持ちが少し紛れた。	「・・・驚かないんですか？」	二人のやり取りを聞いていた美祿は、自分の	太腿の辺りに質問をぶつける。女将はこちら	を見て軽く頷くだけだった。	「申し訳ありませんが・・・正直、初めは驚	きました。」
----	--------------------	-----	-------------------	----------------------	----------	---------------------	--------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------	----------------------	----------------------	----------------	----------------	----------------------	----------------------	---------------	----------------------	--------

確	番	ん	て	人	由		て	吸	押	じ	い	じ	「	「	「	ん	方	「	横
認	才	。	も	は	が	「	い	は	し	ゃ	し	ゃ	だ	・	嘘	ん	に	け	で
し	は		い	、	な	・	く	乱	寄	な	、	な	っ	・	で		問	れ	美
た	そ		い	周	い	・	。	れ	せ	い	側	い	！	な	す		題	ど	禄
。	こ		理	り	の	・		、	る	い	に	で	変	ぜ	っ		が	も	は
話	で		由	と	は	怖		と	入	い	いた	じ	じ	、	！		あ	そ	更
を	一		”	自	、	い		と	り	た	く	や	や	、	！		る	れ	に
聞	度		を	分	と	です		と	す	・	。	な	な	そ			。	は	小
い	言		探	を	も	。		空	る	。	な	な	う	う			あ	さ	さ
て	葉		し	比	。	自		気	空	い	。	の	の	。			な	く	く
く	を		て	べ	分	分		は	気	。	。	か	か	。			。	。	。
れ	切		い	て	存	存		哀	は		。	っ	っ	。			。	。	。
て	り		る	必	在	在		し	哀		。	！	！	。			。	。	。
い	、		の	死	し	し		み	し		。	気	気	。			。	。	。
る	美		か	に	て	て		に	美		。	持	持	。			。	。	。
の	禄		も	”	い	い		変	禄		。	ち	ち	。			。	。	。
か	の		し	生	理	理		わ	の		。	悪	悪	。			。	。	。
、	状		れ	き				つ	呼		。	く	く	。			。	。	。
時	態		ま	て				っ			。	あ	あ	。			。	。	。
折	を		せ	い				。			。	り	り	。			。	。	。

「	あ	な	た	は	、	あ	な	た	自	身	が	抱	え	て	い	る	コ	ン	な	が	ら	顔	を	背	け	た	。	風	に	あ	お	ら	れ	温	度	を	下	げ	る	頬	の	冷	た	さ	を	感	じ	美	禄	と	視	線	を	合	わ	す	こ	と	が	辛	く	な	り	、	番	才	は	・	・	本	当	に	強	い	人	だ	。	る	者	と	比	べ	て	は	自	己	嫌	悪	に	陥	る	。	あ	な	た	は	・	者	と	比	べ	て	は	優	越	感	に	浸	り	、	遥	か	上	に	存	在	す	自	己	と	世	間	の	基	準	の	中	で	よ	り	下	だ	と	判	断	し	た	コ	ン	プ	レ	ッ	ク	ス	を	認	め	る	勇	気	の	無	い	人	た	ち	は	れ	ら	に	は	、	与	え	ら	れ	た	意	味	が	あ	る	は	ず	で	す	。	ぶ	こ	と	が	で	き	な	い	”	も	の	ば	か	り	で	す	。	け	ど	そ	「	コ	ン	プ	レ	ッ	ク	ス	の	ほ	と	ん	ど	は	、	”	自	分	で	選	が	落	ち	た	の	か	黒	い	涙	が	伝	っ	て	い	る	。	静	か	に	顔	を	上	げ	こ	ち	ら	を	向	い	た	美	禄	は	、	化	粧	ん	じ	ゃ	な	い	で	す	か	。	す	る	存	在	価	値	は	、	コ	ン	プ	レ	ッ	ク	ス	の	中	に	あ	る	「	で	も	わ	た	し	は	こ	う	思	う	ん	で	す	。	誰	も	が	欲	し	た	。	様	子	は	見	ら	れ	な	い	。	番	才	は	ま	た	静	か	に	話	し	出	洩	を	す	す	る	音	が	聞	こ	え	て	く	る	だ	け	で	拒	否	し	た
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

事。そしてそこで出会った不思議な存在。そ	不思議な宿屋で起きた数々の不思議な出来			「・・・はいっ。」	のことが好きだよ。」	「他の誰が何て言おうがね、わたしはあんた	「・・・はい。」	「美禄や。」	そう言つて女将は美禄の方を向いた。	があるはずさ。」	もだからこそ、あんた達にしかできないこと	「本当に、生きるのが下手くそだねえ。で	くしてからだだった。	うに女将が笑いだしたのは、それからしばらく	美禄と番才二人の湧をすすする音を掻き消すよ	きない自分が本当に情けないです。」	わたしは・・・分かっていても・・・何もで	めないでください。あなたは何も悪くない！	だから・・・だからどうかこれ以上自分を責	プレックスを認められているじゃないですか
----------------------	---------------------	--	--	-----------	------------	----------------------	----------	--------	-------------------	----------	----------------------	---------------------	------------	-----------------------	-----------------------	-------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

「	あ	ら	あ	ら	お	化	粧	が	と	れ	て	る	ね	え	。	け	ど	そ	っ
「	・	・	・	そ	う	で	す	ね	。	変	わ	っ	た	人	で	す	。」		
	「	・	・	・	ど	う	だ	い	？	不	思	議	な	子	だ	ら	う	。」	
つ	た	。																	
番	才	は	背	中	で	返	事	を	し	な	が	ら	階	段	を	上	っ	て	い
か	ら	ね	。」																
「	寝	て	る	ん	ら	無	理	し	て	起	こ	さ	な	く	て	も	い	い	
は	行	っ	て	参	り	ま	す	。」											
「	え	？	・	・	あ	あ	っ	、	は	い	っ	！	そ	う	で	す	ね	。	で
い	に	決	ま	っ	て	る	だ	ら	う	。」									
「	鈍	感	な	子	だ	ね	え	。	あ	の	子	に	も	会	っ	て	お	き	た
「	雨	ノ	さ	ん	を	？	」												
の	じ	ゃ	な	い	よ	。	あ	ん	た	は	雫	を	呼	ん	で	き	な	。」	
「	娘	子	の	泣	き	顔	な	ん	て	い	っ	ま	で	も	見	て	い	い	も
「	あ	っ	、	は	い	！	」												
	「	さ	あ	番	才	！	」												

